

種々のプレゼンティング、ノティファイイング等の「あいさつ」行動が頻繁にある。2. 優位なオスに依存した攻撃が行なわれるが、オスの連合にもとづく攻撃は少ない。3. 特定のコードモとの間に親和関係がありオス間交渉にこのコードモが関与する。

あいさつ行動は、ハレムホルダーに対しその他のオスたちから開始されることが多い、メスへの接近やハレム間の移動が許容される老齢オス（非繁殖オス）が参加することが少ないなどの特徴を持ち、メスをめぐる潜在的競合関係を反映したものであると考えられる。あいさつは単なるごきげんとりではなく、お互いの力関係のチェック、緊張関係の緩和、他のオスやメスたちへのディスプレイなどの多様な意味を持つ行動といえる。アヌビスヒトでは、より劣位なオスたちが連合して、優位オスを出し抜きメスを獲得するなど、オス間の競合関係は直接的な攻撃の形をとることが多かった。これに対し、マントヒヒがあいさつという多義的な行動によってオス間関係を調整する背景には、社会構造の複雑さが働いているのだろう。連合もあいさつ行動も共にヒヒ類の社会的知能の高さを表わす行動である。音声・表情・姿勢など行動学的にはほとんど同種とも考えられるヒヒ類のオスにおいて、これほどまでにオス間交渉が分化した直接の原因はどこにあるのか。今後はメスを含めた相互交渉パターンの比較を行ないながら考察を深めたい。

計画：3-2

野生ニホンザルの採食場所選択と伴食個体

田中 香（京都大・霊長研）

野生状態では、ニホンザルの採食場所決定は、場所の大きさ、質、量などの生態的要因と、どのような個体と伴食するかという社会的要因により行われると考えられる。そこで、ニホンザルのオトナとコードモが、食物の分布様式の違いによってどのように採食場所を決定しているのか、伴食個体と採食場所の質に注目し、採食効率との関係を調べた。

調査は宮城県金華山島で行った。まず、0歳、1歳、オトナのメスについて、どのような個体のいる場所で採食を行うか比較した。3m以内で同じ採食品目を採食している個体を伴食個体とし、

品目毎に解析した。その結果、一様に分布する品目よりパッチ状に分布する品目の方が、またオトナよりコードモの方が伴食個体数は多かった。またコードモは同年齢の個体のいる場所で採食することが多く見られた。伴食個体の違いによる、単位時間あたりの摂取量の変化を調べたところ、0歳と1歳はパッチ状に分布する品目を採食する場合、オトナ以外の個体と伴食するよりも、オトナ個体と伴食した方が摂取速度が高かった。しかし、一様に分布する品目を採食する場合には、伴食相手にかかわらず摂取速度は一定であった。また、オトナは両品目とも、伴食相手に関係なく摂取速度は一定であった。これはオトナは常に一定の質の場所を選択しているのに対し、0歳や1歳の個体はパッチ状に分布する品目を採食する場合、オトナと伴食した時のみ、質の高い場所で採食できているためと考えられている。しかしながら、高頻度にオトナとの伴食を行うことはなかった。

次に、オトナとコードモがどのような質の採食場所を選択しているか、メギの花にかんして解析した。その結果、オトナはメギの樹冠の表面積、花の密度、花の量の値の大きい木ほど摂取速度が高かった。また、オトナは花の密度の高い木を高頻度を選択していることが明らかになった。一方、0歳と1歳は質に関係なく木を選択していたが、どの木で採食しても摂取速度は一定であり、より質の高い木を選択する必要がなかったためと考えられる。

伴食個体と採食場所の質が、どのように絡み合っているか、個体の採食効率や採食場所選択に影響するかについては、さらに解析する予定である。

計画：4-1

父子判定にもとづく、ニホンザルオスの繁殖数の年推移

井上美穂（京都大・霊長研）

今年度の研究で次のような結果が得られた。

1. ニホンザル放飼場グループの父子判定

若桜、嵐山の2グループにおいて、各年齢における繁殖数を調べた。若桜で1975年から1992年までに生まれた82頭、嵐山で1982年から1992年に生まれた49頭の父親を判定した。オスで26才、メスで27才まで放飼群に存在した例があるが、子供を残している最高齢は、オスで22才、メスで21才だっ